

～「ミンヨン 倍音の法則」京都公開記念・特別朗読～

# 佐々木昭一郎の世界

S h o i c h i r o S a s a k i S c r e e n i n g

説明や解説をことごとく無効にするかのような強烈な映像表現の旗手として、昭和の映像史に大きな足跡を残したテレビ演出家、佐々木昭一郎。唯一無二の映像作品を時代の諸相としてブラウン管を通して世界に届け、いま、長き沈黙を経て再び、今度はスクリーンで新たな映像詩の旅を描いた佐々木昭一郎さんについての特別朗読を行います。

2015.12.26(土) 立命館大学衣笠キャンパス充光館301号教室

<開場/開演>12:45/13:00 (上映後レクチャーあり) <参加>無料 (どなたでもご参加いただけます)  
<アクセス>〇〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1 (京都市バス15、50、51、55、59系統で「立命館大学(終点)」で下車) <お問い合わせ>090-1918-1881 (担当:田中) info@risselcinema.com  
<主催>立命館大学映像学部川村ゼミ 共催:立誠シネマプロジェクト 協力:シグロ

13:00

## 夢の島少女

1974年/75分/制作著作: NHK

作・演出: 佐々木昭一郎

音楽: 池辺晋一郎 撮影: 葛城哲郎 音響効果: 岩崎進

出演: 中尾幸世、横倉健児、友川かずき、若林彰、菊地とよ

◎これがデビューとなった中尾幸世演じる少女。その過去も未来もすべての“私”が行方不明となった喪失感、時折見せる目覚ましいばかりの視線の強度は圧倒的。パッヘルベルのカノンが寄せては返す波のように観る者に迫る。ストーリーも解説も寄せ付けない、佐々木演出の圧巻の炸裂。

14:30

## 四季・ユートピアノ

1980年/100分\*国際版/制作著作: NHK

作・演出: 佐々木昭一郎

撮影: 吉田秀夫 編集: 松本哲夫 録音: 長谷川忠昭

出演: 中尾幸世、大川義行、横倉健児、横倉祐二、小林千秋、宇都宮信一

◎雪のなかの少女と兄の記憶から始まる、ピアノ調律師・栄子の音の記憶をたどる映像詩。佐々木昭一郎演出のひとつの到達点と位置づけられ、第32回イタリア賞RAI賞、国際エミー賞優秀作品賞ほか、多くの賞を受賞。日本映像史上の紛れもない傑作。マーラー「交響曲第四番」、バッハ「主よ、人の望みの喜びよ」、そしてベートーベン「第九」が栄子の人生の歩みを物語る。

光の速度で  
音の速度で  
まるで昨日の音のように  
風の中  
人の望みの喜び  
もう一度自分の音を聞かされた  
作は、魂の光からまがくすくすにやがてくる  
聞こえてきたんだ「四季」ユートピアノ/劇中より

16:20

佐々木昭一郎監督・講義

### ミンヨン 倍音の法則

2015/12/12(土)~2016/1/8(金)

<12/29~1/5は休映>

料金▶ 当日一般 : 1500円

学生・シニア : 1200円

立誠シネマ会員 : 1000円

詳細▶ <http://risselcinema.com/movies/1160>

立誠シネマ

京・立命館大学校 080-3770-0818

『夢の島少女』 後日談。

佐々木昭一郎 (映画監督)

----- はじめに、簡単な自己紹介をしておきたい。私は1936年1月25日東京渋谷区の代々木上原に生まれた。誕生から一か月して、2・26が起きた。代々木練兵場の方角から反乱将校たちと軍の機関銃の音が聞こえてきたと母は後に教えてくれた。大雪の日だったらしい。父はその頃、満州の吉林にいた。父は早稲田大学政治経済学部在籍時に『雄弁会』（今で言う部活動）で演説が上手く、左右中道から政治活動に勧誘された。全体主義が大嫌いな父は、彼らを振り切り渡米（当時は飛行機がなく渡航）。コロンビア大とエール大でジャーナリズムを学んだ。当時からコロンビアにはジャーナリズムを専門Curriculumに据えていた。ウイスコンシン大にも遊学。二、三年滞在して、パリに渡りパリ大学でアナトールフランスの門下生になった。早稲田大学時代の親友で毎日新聞欧米部記者に頼まれ、現地採用のパリ特派員となった。文学とジャーナリズムの間を往来しながら第一次世界大戦後のバブルに浮かれた世相を見つめた。さまざまな武勇伝や馬鹿をやらかしたらしいが、若気の至りのその頃の父をモデルにした短編を作家の獅子文六（岩田豊男）が書いている。岩田は演劇の勉強にパリにいて、後に劇団『文学座』を旗揚げした。芝居は本名の岩田豊男。小説は獅子文六をペンネームにした。画家の藤田と親しく、私の母の兄は画家で藤田の親友。父はフランス女イボンヌと結婚。十数年ぶりに浦島太郎の如く日本に帰った。しかし離婚。僕の妹はどうだい？と母の兄貴は父に母を出会わせた。そこで長男の私が誕生したというわけだ。パリはバブル。負けたドイツはナチが勃興。ロシアは破綻。日本は第一次世界大戦の武器製造で大儲けした。父は日本陸軍のごく一握りの将校たちの腐敗を告発する記事を書き、『事務手続き上の都合により解雇』という理不尽な理由で記事は没収されクビを切られた。満州での父はロシアチョコレートのパリに売る会社を作った。同時に、彼はパリの通信社に寄稿し続けた。父は夏休みをとり、ロシアチョコレートを土産に帰国し数日して満州に戻った。七歳の夏。父は私の目の前で軍部（秘密警察＝特高）により汽車の中で謀殺された。

<村上紀史郎氏> kimio murakami

私は、テレビディレクターであった時代（1994年退職）、自作について、数多くの文章を書いた。しかし、満足な文章はひとつもない。

『ミンヨン倍音の法則』を仕上げた2014年、宝島社から出した『創るということ』の改訂版（青土社）の語り下ろし部分の打ち合わせで、村上紀史郎さんと四谷三丁目のチェコ家庭料理店『だあしえんか』で歓談した。私は『ミンヨン倍音の法則』は如何なる映画か延々と話した。話してるうちに、どんな映画か、私自身もハッキリするだろうと思った。村上さんが、私の話を止めた。村上「作者は自作は語れないんですよ佐々木さん！」

<遠藤利男氏> toshio endo

1969年。大阪万博を翌年にひかえた年の秋。神戸の『港のまつり』の雑踏を背景にさすらうケン少年の『マザー』を撮った。制作：遠藤利男。撮影：葛城哲郎。録音：長谷川忠明。16ミリフィルム。同時録音シネコーダー。

世界の映像史上、初めてワイヤレスマイクを使用。私のテレビ処女作だ。

1971年度モンテカルロ国際テレビ祭金賞（ゴールド・ニンフ）を受賞。翌年、RAI、イタリア放送協会がローマで開催した国際シンポジウム『放送における言語の問題国際会議』の議題作品として『マザー』は話題になり、議長のロベルト・ロッセリーニ氏から、絶賛された。ロッセリーニ氏は『戦火の彼方』、『無防備都市』、『ストロンベリ』で知られるItalianネオリアリズモの生みの親。ヌーベルバーグの監督たち特にジャン＝リュック・ゴダールに影響を与えたと聞く。

しかし、にもかかわらず、日本での『マザー』の評判は芳しくなかった。評論家は無視。テレビ界では最低の評価を流布した。しかしながら、若い視聴者の中からきわめて熱い評価がわきあがったのを私は肌で感じた。何人かの学生が私に会いに来た。彼等は放送局や広告代理店の就活面接でこう言われたと聞く。「佐々木昭一郎みたいな奴にはなるなよ。佐々木の真似だけはするな」。

私のいたNHKの評価も低く、特にドラマ関係の古参には唾棄すべき作品だった。あるテレビドラマ一筋者はこう言い放ち私を弾劾しにかかってきた。「私は学校に行きま、というのが正しい日本語だ。だが、君のこの『マザー』はだ！私は学校に行きまく、って言ってる。叩き潰すべきだ！」

同年、私と遠藤利男プロデューサーは『さすらい』を創った。撮影：葛城哲郎。録音：渡辺秀夫。90分。16ミリフィルム。

『マザー』は西へ。こんどは北へ、さまよう話だ。いずれも既製のドラマを超えようとする挑戦だ。出演者は全て職業俳優ではない一般人＝実生活者。エブリデー・ピープルだ。芸術祭に参加しNHKが13年も取れなかった大賞を受賞した。

私は『マザー』と『さすらい』で芸術選奨新人賞を受けた。しかしながら、業界＝映画テレビの評判は良くなかった。またしても、「佐々木君！君い！これはまた、私は学校に行きまく、じゃないかよ！」であった。

ちょうど三島由紀夫が自決して間もない頃だった。『さすらい』の少年ヒロシがサーカスのテストでヘタリ、上半身裸になりベンチで喘ぐ場面に、ヒロシの心臓部にアリを一匹這わせた。このショットを「君い！こりゃ異端だよ！」私「異端ですよ芸術はみな！僕は美を描いたんですよ！」

後に会長になった石頭の官僚は、望むところの芸術祭大賞を祝福せず。五階の社員食堂に私と遠藤利男を呼び付け、会費五十円のコーヒー一杯だけの祝賀会を開いた。ほかに担当部長を呼び付けこう言い放った「こんな危険な思想のドラマはもういい！」私「あなたは放送法を読んでりゃいいんだ！」

私は以後の三年間、連続ドラマの演出助手をしながらネクスト・チャレンジの風待ちをした。

<夢の島少女> 編集：松本哲夫。

遠藤利男は佐々木昭一郎を甘やかすから、あんなもんしか出来ない、と批判され、次なる佐々木ドラマのプロデューサーは各務孝氏に決まった。三年間、スタジオドラマのセットのかき割りから各務孝は私を解放した。実際、スタジオという酸欠、ほけりだらけ、太陽光をライトで作る不自然な環境によりドラマは窒素している。いま現在でも窒素しているのだ。

『さすらい』から三年間は、脳みそも酸欠だった。私はある朝早く、太陽の方角に向かい歩いた。地下鉄を乗り継ぎ、夢の島埋め立てのトラックをヒッチハイクした。

高度成長。ゴミの山。都民が捨てるモノが私に訴える。白いサンダル靴。真っ赤なボロボロのワンピース。朝の太陽の幻覚。私は、白いサンダル靴。真っ赤なワンピース。こけし頭。博多人形の髪型。戦時中のオカッパ少女が目の前を擦過する幻を得た。夢の島少女だ！

この瞬間、「夢の島少女」の物語が海岸の酸素で生き返った私の脳みそを、痙攣させてくれた。

1974年の初冬。主人公の原風景から撮影開始した。ヒロインはまだみつかっていなかった。各務孝担当部長プロデューサーは、藤村恵 (kei fujimura) 氏に制作を任せた。藤村さんは熱意にあふれ、ヒロイン探しを芸能界に求めた。彼は岡本喜八監督の映画で、全裸になったという少女をある芸能事務所で発見したと言い、私と会わせた。一目で私の作品には全く向かないと断った。芸能界に噂話がたちまち広がった。佐々木はその少女のお辞儀の仕方が悪いからと降ろした。とんでもない野郎だ、と言うありもしない嘘が本当のように風評化した。この話は最近になって、つまり撮影から40年経った今になって各務孝氏から聞かされた。風評千里を走り善評一里も走らずの芸能界だ。

ハリウッド映画のために働くキャスト&スタッフは僅か四万人だ。日本は数千人だろう。これらの業界の価値観が世界中を差配、日本中を差配する。××映画祭受賞、と言っても大したことないのだ。芸術祭なども話のほかに低い低い。芸能界の出来事にしか過ぎない。

そんなさなか、ヒロインが見つかった。中尾幸世 (sachiyo nakao) さん。都立松原高校の三年生。女優志願者ではない。美大志望の受験生だ。

千葉市で劇団 (ルネサンス) を主宰する若者、大川義行さんが友人知人を通じて捜し当てた金塊だ。会った瞬間に頭の中でシナリオを書き換えた。全裸になった少女も、葛城カメラマンにテスト撮影してもらった。歩く姿と立ち止まっている姿のみだ。簡単な芝居を教わるだけで、ただかわいいだけで、誰でも女優になれるのが日本芸能界だ。一秒もしないうちに演技の型を、わざとらしく作る。私には芸能事務所のタレントは向かない。天才アラーキーのモデルにも会ったが私には向かなかった。

中尾幸世さんは大きな才能だ！

テスト撮影などする必要なく、いきなり撮影に入った。中尾さんが現れなければ、『夢の島少女』は諦めるつもりだった。滑り込みセーフでメ切りに間に合った。約十日間で一気に撮影したのである。

撮影中に、人事異動があった。ドラマ担当の副総局長に教育畑から根本良雄という勝ち気で威張りたがる白髪頭の官僚が就任した。あだ名は白髪。また、ドラマ部から管理職に昇進した自称ミスターNHKディレクターが、ドラマディレクターの後進の指導者的立場を任された。ドラマなどは教わって出来るものではない。いかにして、経営幹部の出世の邪魔をしない没個性的なドラマを作るか。その道標となる管理職が配置されたのだ。白髪。ミスターNHK。この二人の人物が『夢の島少女』のその後の運命を決めた。こうだ！撮影中に401オーディションルーム（フィルムを大スクリーンで試写する大スタジオ）で撮影済みのラッシュを見せろと言うわけだ。ミスターNHKは、よくない、よくない！とラッシュを見終わるや、大声で私を弾劾しにかかってきた。白髪は、佐々木に公共放送を私物化させるな！と藤村プロデューサーを呼び付け、どやした。

『夢の島少女』は私が書いた企画書が評価されイタリア賞参加作品に決まっていた。しかし白髪の命令でドタキャンされた。白髪はまた、15分カットせよと命じてきた。私は激しく抵抗した。白髪と対決すべく、白髪の部屋を訪ねたが、気の弱い官僚である白髪は、秘書を使い逃げた。

かくして、予算を使ったからにはON AIRせねばならぬ、ということになり、突然、芸術祭参加枠でON AIRすることになった。条件は15分切れ、である。私はバツサリ15分、カットした。我が作品は、ラジオドラマ時代から、どこを切ってもすぐつながるのだ。

#### <差別>

1974年10月の長嶋茂雄引退の頃、『夢の島少女』はなんの予告もなしにON AIRされた。ON AIRが終わるや、使用音楽の題名を教えろ、という電話やハガキが来た。かなりの数だ。

私は当時、殆どの方が知らない「パッヘルベルのカノン」を全編に使った。クラシック音楽のわがままなファンから、なーんだ、パッヘルベルのカノンじゃないかよ！、とチャチを入れられるのが面倒くさいから、スタッフ以外には誰にも言わなかったが、ON AIR後に爆発的にカノンが流行った。

ON AIRから数日して、日経夕刊に映画評論家の佐藤忠男が、こんなことを書いたので、なんだこの評論家は！と私は呆れ返った。「汚らしい若い男女が、ただうようよする汚らしいドラマだ。汚らしい若者を撮影するために、NHKはヘリコプターまで飛ばしている。受信料の無駄使いだ。」

その他の新聞も異口同音、同じフレーズで我が『夢の島少女』を弾劾しにかかって来た。火だねは内部からだった。

翌月、芸術祭の審査結果が文部省から知らされてきた。落選は私の読み通りだ。審査員は、飯島正。内村直也。原千代海。大木豊。佐怒賀三夫など。

審査員委員長から編成宛に注意書きが届いた。『夢の島少女』のような芸術に相応しくない作品は参加させるな、と言うものだった。私は、ざまあみろと思った。わかってたまるか！

各社の、同じような文言による『夢の島少女』を弾劾する記事は、早稲田大学演劇映画名誉教授の飯島正門下生によるものと私は読んだ。門下生のミスターは、東京新聞のコラムに実名でこう『夢の島少女』を弾劾した。「テレビはブラウン管が勝負だ。しかし、大スクリーンで聞くに堪えない音楽を流して試写した奴がいる。テレビを何だと思ってるんだい！」

私はテレビのディレクターだから、映画監督のように観客と触れ合うチャンスはなかった。顔が見えない不特定多数に向かってドラマをON AIRするわけだ。私の作品は、大体、3%から5%の視聴率しか取れなかった。深夜でも、プライムアワーでも、夕方のセカセカとした時間帯でも、この数字は一定していて、しかも、切れ目がないと編成局の同期が私を励ましてくれたが、理事とか局長とかは、100%の数字でも、100を越えろと要求する汚い連中だ。

佐藤忠男の乱暴な批評が日経夕方に載り、ミスターNHKが東京新聞で私を後ろから斬る。芸術祭審査委員長からの、『夢の島少女』は芸術に在らず、との私を弾劾する活字に脅えた官僚どもは、私を干しにかかってきた。「素人は危険だから。下手くそだから。汚ならしいから使うな。解らないドラマは悪だ。わかりやすいドラマを作れ!…」ということになった。

汚ならしい、と弾劾された中尾さんと横倉健児を私は守らなければ、ならぬ。それには、何としても、次回作で再び二人に出演願ひ、弾劾と差別に向かって新作を創らねば始まらない。

翌年から私は服役中の模範囚の如く、演出助手の仕事を喜んで引き受けスタジオでの働き者になった。しかし、いわゆる、ひとつの、改心を求める連中には、数年の<服役>を私は引き受けねばならない。素人俳優はもう使わせない。プロの俳優を使え。原作ものを使え。ということになった。

<テレビを消せ!>

『夢の島少女』は、散々だった。谷底まで落ちたのだから、はい上がるしかない。そんなある日、ON AIRから二か月の頃。自宅に分厚い封書が届いた。開けると「日曜日にはTVを消せ!」と題したB5大に袋とじされた手書きの冊子が入っていた。30頁に及ぶミニコミ誌だ。

『夢の島少女』の特集号とある。書き手は、豊橋市在住の藤田真男さんと札幌市在住の池田博明さんの二人だ。池田さんも藤田さんも大学生だ。『夢の島少女』を見ての衝撃と感動が、あふれんばかりの情熱で書かれてある!。手書きの二人の交換日記の形で『夢の島少女』が論じられている。それは、自己の守備範囲からしかものを見られない評論家とは完全に違い、新鮮でのびやかな感性と論理に満ち溢れていた。「日曜日にはTVを消せ!」は池田博明さんと藤田真男から日本全国の友達に郵送され、拡がった。映画監督のように観客の顔は私には見えない。今すぐそこに、二人の観客が見える!私は救われたのだ!

当時は、予告編などの番宣には拙作は取り上げられたことがなかった。いきなりON AIRされた。二人の若者は、チャンネルをひねったら、凄い映像が目に映り釘付けになったと書いている。これだ!これなんだ!俺の作りは正しかったのだ!

方法即主題。我が作りが、拡がったのだ!とラジオドラマ1963年の処女作『都会の二つの顔』以来、変えなかった我が「方法即主題=帰納的作劇術」に自信を深めた。

××映画祭受賞作品であるとかの飾り付けで観客を誘うことより、わずか二人の観客と心から触れ合う。直心ということ。

それを大事にすること。

そこに気が付く今、芸術祭や国際賞などの飾り付けは要らない。ビリビリに破いて捨てようこの時決めた。

<紅い花>

1975年夏。遠藤利男の援護を得て、私は土曜ドラマ。劇画シリーズ三本の単発の企画書を書いた。つげ義春の原作から、『紅い花』。撮影:上原康雄。橋本和憲。脚本は大野靖子さん。音楽は池辺晋一郎さん。出演者は全員、プロの役者にした。脚本家の大野さんか飼犬の死で悲嘆に暮れ書けなくなり、私はかねてから用意周到に準備した自作シナリオで撮影した。

VTRスタジオ撮影二日。ロケーション一日半。タイトルバックは16ミリフィルムで葛城カメラマンの助手を『さすらい』の時に一日だけつとめた橋本和憲(kazunori\_hashimoto)さんにお願ひし、半日かけて、木場から隅田川に至る水路の滑走と都電の先頭から線路の滑走を撮影し、川面の前進移動ショットと深く深くオーバーラップした。橋本和憲の名撮影である。このショットで芸術祭大賞。国際エミーを取ったのだ!いまのところ、BBCが買い付け、自社字幕版を制作しON AIRした日本のドラマは拙作が最初で最後である。

### <四季ユーピアノ>

しかし、それでも自作シナリオによるドラマの企画書は通らず、演出助手に戻り、『夢の島少女』から六年後の『四季・ユートピアノ』（撮影：吉田秀夫。録音：長谷川忠昭。編集：松本哲夫）まで待ったのだ。

その間、先の若き村上紀史郎(kimio murakami)が編集者をつとめるTBS調査部発刊の月刊誌『調査情報』に、村上さんの依頼で二年間にわたり<ディレクターズノート>を書かせてもらった。

その連載には、『四季・ユートピアノ』の全てのイメージを書いた。ON AIRを見た村上さんは、連載の言葉たちが、そのまま『四季・ユートピアノ』で映像化されていた、と『友人知人仲間によるエッセイ集』に書いてくれた。テレビマンユニオンの今野勉さんが横浜の日本大通りにある放送ライブラリーで2004年に開催した『佐々木昭一郎の世界』作品上映会のパンフレットにも村上さんは書いている。

『四季・ユートピアノ』は、BBCアナウンサーで詩人で作家のイアン・ド・スタインズさんの名訳により世界最大級で、70年近い歴史と伝統を誇るPRIX ITALIAのたった二つしかないグランプリに当たる賞を得た。私にとってはラジオドラマ部門で得た1966年度のイタリア賞とともにRT=Radioテレビ両部門での初の受賞者になった。国際エミーでも受賞し、欧米でON AIR。特筆すべきはアメリカPBSが買い付けてくれて、三年かけてスポンサーを探し、全米ネットでON AIRしたこと。その買い付けを熱望してくれたバーバラ・バンダイクプロデューサーの真心は永久に忘れない！

世界のvariety誌はコラムで中尾幸世さんの演技力に称賛の言葉を惜しまなかった。日本の芸能界は、中尾さんを、ど素人呼ばわりして認めないのだから、全くの島国根性丸出しの恥ずかしいことだ。いま現在でも私の出演者に対する態度は同じなのだから、何ら進歩も進化も革新もない。

### <川へ>

四季の大成功にもかかわらず、私は次回作の実現を探して、世界を放浪することになる。

予算の半分以上は海外のテレビ局が負担し、NHKは六百万までは出資するコントラクトで私はまず、川シリーズに挑戦した。『川の流れはバイオリンの音』。『アンダルシアの20時』。『春・音の光』。

川。音楽。人の出会い。この三本柱を据えて、主人公の意識の流れを描いた。

川・三部作を見た毎日新聞学芸部長の伊藤延司さんは、いたく感動してくれて、1985年度『毎日芸術賞』映像部門（映画・テレビ・アニメから一人選び出す）個人賞に私を選び、諮問委員会を設け、私に毎日芸術賞個人賞を決めた。後に担当の脇地炯記者が教えてくれた。伊藤さんはヨーロッパ特派員の経験から、ヨーロッパの川を描く拙作を、いち早く評価されたとのこと。毎日芸術賞とラジオテレビ記者会賞。この二つは、私の誇りだ。かつて私の父親を『事務手続き上の都合により解雇』という理不尽な辞令で首斬りした毎日新聞社。私は受賞式の日、老いた母を同伴し出席した。母は泣いた。

『ミンヨン 倍音の法則』で私は父母を描いた。父の二重想像を父の母校、早稲田大学で撮影した。ジャーナリスト魂！、と主演のミンヨンと旦部さんに叫ばせた。魂はここに置いて行くのだ、と。それからミンヨンは日本の名曲中の名曲（池辺晋一郎氏曰く）である古関祐司『紺碧の空』を歌う。私はこの歌の背後に複合型イメージのジャーナリズム批判を忍ばせた。感じる人にはわかるだろう。読めない人は、なんだ早稲田大学の片棒担ぎだとあざ笑ったが、映画はテレビとは違う。わからない、と言われたら、勲章である。

### <京都は御縁だ>

1985年5月。新橋第一ホテルの大ホールを2時間借り切り、毎日芸術賞。芸術選奨。放送文化基金賞の祝賀会を開かされた。合計百二十万の賞金を全て注ぎ込み、それでも足りず銀行からかなりの借金をして、祝賀会を開かされたのだ。形を示せと。佐々木昭一郎を励ます会と題された。内外から四百人が参加。生涯の大盛会だったが、明日からどうやって食べて行くか、不安だらけだった。川シリーズが打ち切られたのだ。

こんなに受賞したのにNHK内部抗争（報道局政治部記者と芸能局の会長との椅子をめぐる抗争）の犠牲になったのが、川シリーズだ。「佐々木はいつまで、アレをやってる？」との報道局系放送総局長の尾西清重

からの佐々木潰しだ。大河なら戦いやすい。人気芸能人が主演だから。拙作は潰しやすい、ど素人だからだ。この腐ったような抗争者！弱者虐待者どものハラワタ！！

翌日、私は、京都大学の学生、荒田正一さんの招きで京都に旅立った。荒田さんと京大生の仲間が主催する佐々木昭一郎の世界、上映会に呼ばれたのだ。荒田さんたちは、拙作16ミリフィルムを町の映画館で公開したかったのだが、著作権を持つNHKがNHK京都放送会館でなら許可する、と介入してきた。その後、いろいろなところで私は拙作の上映会に参加したが、NHK著作権部門が必ず上映をはばんだ。曰く、佐々木はうちの使用人である。使用人に著作権はない。著作権料を払え！さもなくば上映させない！一点張りだ。

つまり、佐々木は社畜だ（しゃちく＝会社に飼われている畜生であるという理屈）。

しゃちくに著作権などない、という野蛮なる屁理屈だ。

京都会館は満員だった。

私は何故こんな会館で上映しなきゃならないのだ、とNHK京都放送局長の長野さんに抗議したが虚しかった。荒田さんたちの上映会はそれでも大盛況だ。京大パワー炸裂だ。荒田さんたちと加茂川の岸へでて乾杯した。つい昨日のようだ。

翌日、私はフィンランドに向かった。フィンランド航空の旅客営業部長の高野君と私は大学の同級生で部活も同じESS。「佐々木、川シリーズは大傑作だよ。あのタッチで、フィンランドを撮影してくれよ。飛行機なんか撮影しなくていい。フィンランド航空がスポンサーになる。」との嬉しい申し越しだ！

以後、海外合作を10作品近く、退職する1995年1月末まで創り通した。特に社会主義国との合作は気の毒だった。東側社会主義国のお金は、西側諸国には換金不可能な紙屑だった。合作は予算半分この契約をする。私とスタッフは換金できるが、来日した合作国が社会主義国の場合、そのスタッフ、キャストは紙屑しか持っていない。私は、家族を犠牲にした。安月給を全部はたき、彼らの足しに使い果たすわけだ。この繰り返しだった。退職時の銀行の借金は退職金を上回り、私は破産した。

作品の中身とテーマは相手国と半分こするのが礼儀だ。妥協しなきゃ作れない。

それでも、彼等との合作、特にチェコの親友たちの献身に應えるために、私は合作をやめなかった。威張るなニッポン！ジャパマンナーだけが作品じゃないんだ！。

日本の売れっ子放送作家たちは合作をからかった。「妥協して合作が潰れるドラマを作ったらどうか」と。無視だ！

#### <立命館大学>

京都の立誠シネマでの『ミンヨン 倍音の法則』の公開記念に沿い、立命館大学の協力を意識に入れて、こんな長い文章になった。ここに書いたことの大半はこれまで私は書いたことがない事柄だ。京都が書かせた。

#### <リッチーさん>

映画監督にまつわる本はたくさん出ている。その中でも、なるほどザワールド！、ドナルド・リッチーさんの名著『黒沢明の世界』は読ませる。映画文学書というものが存在するとすれば、それはリッチーさんだ。

日本人が書いた音楽文学書を意識した本で読むに値する本は一冊もない。

#### <戸田桂太氏>

テレビディレクターを書いた本は書店で見たことがない。もちろん、私について書かれた本など、とんでもない一冊もない。

しかし、私について書かれた秀逸なる文章は三つある。

永遠なる創造のよき仲間・遠藤利男が書いた『佐々木昭一郎の世界への、いくつかの手がかり』。

A4一枚の短い文だが、一冊分の価値がある。映人社の『ミンヨン倍音の法則～シナリオ+ドキュメント』の巻頭にある。  
もうひとつ。吉田直哉『佐々木昭一郎氏の仕事』。拙著(村上紀史郎編集)『創るということ』(青土社)におさめられている。同じA4一枚であるが読ませる。

そして今年6月号。NHK出版『放送番組と研究』。武蔵大学名誉教授である戸田桂太氏が、長文の論文を発表した。題して佐々木昭一郎の仕事場。26頁もある。私にとっては、もはや一生に一度の有り難い名文である。(この拙稿は、携帯の親指で打った一気書きである。誤字脱字あり。御免!)

<はらだだけひで氏>

拙作『ミンヨン 倍音の法則』はミニシアターの老舗・岩波ホールで9週間、ロードショー公開された。異例のロングランであった。

『ミンヨン 倍音の法則』は、岩波ホールのたけひでさんの、献身の限りを尽くす支援とフランスで高い評価を受けているシグロの山上徹二郎氏の献身で成り立った。また、遠藤利男氏は粘り強く私の背中を押してこう述べた。「...マウンドに立っているピッチャーは佐々木昭一郎だけです。ボールを持っているのは、あなたです。このまま退場したら、あなたの創造力を過去のものとして安心していた多くの者たちの思うツボです。あなたが今も未来も現役の創造者であることを実証しましょう」。

かつて、『夢の島少女』を死守したプロデューサーの各務孝氏は、支援し続けてくれた。

はらだだけひで、の名でユニークで唯一無二の画風の持ち主である画家で絵本作家の岩波ホールの原田氏は、ポケットマネー、いやそれ以上の預金を叩いて貢献した。  
岩波は資金提供はしないが、企画プロデューサーとしてヨロズ交渉事を原田氏が担った。ミニシアターが大手シネコンとハリウッドの圧力で悲惨で壊滅的な状態にあること。原田氏から学んだ。

<梁木氏> mr.hariki

シグロの山上氏は一人でも多くの観客に『ミンヨン 倍音の法則』を見てもらいたいと、赤字覚悟で地方都市のミニシアターに配給した。アジアフォーカス福岡国際映画祭の梁木氏も山上氏に共鳴して、日本映画の参加は普段は受けない映画祭ながら、『ミンヨン 倍音の法則』を一人でも多くの博多市民を見せたいと招待してくれた。このように、二十年ぶりに創る私をよき創造的な仲間たちが支援してくれたのだ。前に前に進むしかない。

<RKB木村栄文氏の大傑作『桜吹雪のホームラン 大下弘』>

毛筆の日記を書き続けた大下弘は、ご存知、西鉄ライオンズの野武士野球の看板スター。桜吹雪のホームラン 大下弘』は福岡RKB毎日の大ディレクター木村栄文氏の傑作で、数年前、オーデトリウム渋谷で公開され、楽しくて楽しくて私は三日連続で見に行った。

その中で、選手たちの証言があり、西鉄ファンであった井上光晴氏のウキウキするような発言が耳に焼き付いている。井上光晴氏『巨人の9連覇?誰も覚えちゃいないよ。あれは会社員の野球さ。西鉄ライオンズを見てご覧なさいよ。大下。中西。豊田。自分の魅力を売って歩く行商人さ!』

<一対一>

ハリウッド映画が広告を撒き散らし人々はその伝染病にかかっている。  
米ソ戦争突入にまつわるグズ映画であるのに、人々は浮かれタヌキの××踊りである。

<むすび>

私は映画も放送も一対一で十分成立すると信じる。  
百万人の浮かれタヌキの××踊りの観客よりも、一人の料より質の観客のほうが本物だ。  
博多で。京都の立誠シネマで、そう感じた。立命館は一人でも行くつもりだ。

<記録>



『夢の島少女』は、フィルムからVTRに移して(テレシネ)ON AIRされた。ネガティブとポジティブは廃棄寸前にヨコシネDIA(株)のタイマー・笠原征洋(masahiro\_kasahara)が社の冷蔵庫に保存した。笠原さんは拙作フィルムの全てをタイミング(ネガティブ現像とポジティブ)を行った。

『夢の島少女』は、笠原さんのよき機転によりフィルムライブラリーに永久保存された。しかし、索引カードには朱印で『放送要注意番組』と押された。1996年、NHKは衛星放送の実験から本放送に踏み切った。いわゆるBS放送だ。

ある日、1990年撮影の拙作。チェコ合作『ヤン・レツル物語〜ヒロシマドームを建てた男』(撮影:吉田秀夫)の山本壮大プロデューサーから連絡が来た。『夢の島少女』ほか五本を『佐々木昭一郎の世界』というタイトルで、BS2でON AIRさせてよ佐々木さん!私はビックリした。山本さんは私が引退して二年目にBS第二部長に就いていたのだ。俺「なんでまた急に?」山本「BSには予算がないんですよ。佐々木作品は再放送の著作権料を佐々木さんに払う必要ないから、助かるんですよ。ただだからワッハハハ」。。BSを開始したが、ソフトが不足しているのだ!

私のは、素人だから、ただなんだとさ!笑ってしまった。

ディレクターに著作権がないのは、先進国では日本だけである。

社会主義時代でさえ、チェコテレビのディレクターには著作権があった。給料は別で、一本なんぼ、の契約だ。なんたる知的財産権については超野蛮国家なんだニッポンは!

『ミンヨン 倍音の法則』の著作権者は私だ。初監督作品である。

現在、京都木屋町。繁華街のど真ん中にある立誠シネマで公開中である。舞台挨拶といっても、観客は小人数。深い熱い対話の交流を、初日に味わった。

短く書いたが、これが私の創作遍歴である。

面白い、もっと書け、と言う人がいたら、言い触らしてもらいたい。  
本を書きます。

終り。